



そして、他の作品もないかというところで、「父の暦」とか「遙かな町へ」が出版されるようになったのです。向こうでもよく「なぜ、ヨーロッパの人たちに受け入れられるのですか」と質問されるのですが、描いてる本人はよくわからないんですよ。ただ、一つだけ言えるのは、読者は同じ人間ですし、同じような



### 作品への思い

苦しみとか、悲しみとかを感じます。場所や文化の違いはあるかもしれませんが、基本的な人間の感情みたいなものは、どの世界の人も変わらない普遍的なものではないかと思えます。物語も家族のお話なのですごく分かりやすかったのでしょうか。

**竹内市長** 特に外国で評価されるために何かをしたということではないのですね。

**谷口さん** 外国の読者を想定して描いている訳ではなかったので、作品が受け入れられたというか、「感動した」という言葉を聞いて本当にうれしかったですね。

**竹内市長** 「父の暦」は鳥取の町が舞台ですし、「遙かな町へ」は倉吉ですね。鳥取市出身の谷口さんの作品が世界で認められているということ、鳥取市民にとっても大きな感激、感動だと思っています。「父の暦」は鳥取大火の話も出てきます。鳥取で育たれますから作品への思い入れはそうとうあると思います。

**谷口さん** そうですね。この作品に関しては、思い入れはかなり強いですね。この物語を描こうと思ったのは、たま仕事の取材が近くであり



まして、十何年ぶりかで鳥取に帰ったときに、「鳥取はこんなにいいところだったのか」と感じたのがきっかけです。その感動を編集部に話し、鳥取を舞台に作品を描くことにしたのです。物語をどうするか迷いましたが、鳥取大火という大きな災害があったので、鳥取大火を含めて、自分の郷里ふるさとのいいところを表現できればいいなあと思いながら描きました。

**竹内市長** この「父の暦」は、鳥取市に久しぶりに帰ってこられて、いいところだと感じられたことが一つの出発点なのですね。

**谷口さん** 若いときは、意識していなかったのですが、歳をとってきて郷里があるということの幸せをすごく感じましたね。おそらく鳥取の土地柄、人柄とかいろんなものが含まれていると思います。

**竹内市長** 「父の暦」は、お父さんの家族に対する深い愛情に気付くお話ですよ。ね。「遙かな町へ」も、幸せを捨てて

